

国際ピアノコンペティションの現状

The present situation of international piano competitions

今井 顕
IMAI Akira

国立音楽大学研究紀要第37集抜刷

2003年3月20日発行

国際ピアノコンペティションの現状

The present situation of international piano competitions

今井 顕
IMAI Akira

コンペティションにおける演奏の評価と採点に関する問題点を挙げ、それに対する対処方法に関して考察する。ならびに第13回ジーナ・バッカウアー国際アーティスト・ピアノコンペティション（2002年開催）にて運用された新しい審査方法の全容を紹介し、その方式による審査に実際に携わった印象を論じる。

キーワード：ピアノ演奏、コンペティション、コンクール、バッカウアー

1. はじめに

音楽を利用した競争は昨今の「コンペティション」に限らず、数世紀も前から存在していた。音楽の最も基本的な形である歌唱による競争の例としては、ヴァーグナー作曲のオペラ《ニュルンベルクのマイスタージンガー》で上演される物語があげられよう。物語の設定は16世紀中葉のドイツで、当時のニュルンベルクで毎年ヨハネ祭の日に行われたという歌の競技の情景がオペラの根底となっている。このような「年中行事としての音楽競技」が成立する以前にも、類似の行為に関する長い歴史が存在していたらう事は想像に難くない。

鍵盤楽器による演奏競技に関しては、1707年頃ヴェネツィアで行われたドメニコ・スカラッティとローゼングレイヴ Thomas Roseingrave のチェンバロ競演、1709年頃ローマのオットボーニ枢機卿邸で行われたドメニコ・スカラッティとG.F.ヘンデルによるチェンバロおよびパイプオルガンの競演、1717年にドレスデンのフレーミンク伯爵邸で計画されたJ.S.バッハとマルシャン Louis Marchand によるチェンバロ競演（マルシャンは競演会場に現れないまま出立してしまい、この競演は成立しなかった）その他の記述が残っている。

ピアノ（フォルテピアノ）による競演も、この新し

い楽器のための作品が創作され、フォルテピアノの認知が広まるとともに、行われるようになった。競演させられる当人にとってこのような座興にかり出されるのは迷惑であっても、当時の音楽家たちは貴族などのパトロンに庇護なくして社会の表舞台で活動できる状況にはなく、パトロンが望めばそれを拒否できる立場になかったと思われる。モーツァルトとクレメンティ、ベートーヴェンとゲリネック Josef Gelinek、ベートーヴェンとヴェルフル Joseph Wölfl、ベートーヴェンとシュタイベルト Daniel Steibelt など、その例は枚挙にいとまがない。

これら是一对一で行われる個人競技で、各演奏者の趣味や音楽性の差や演奏技術の優劣を聴衆が観察して楽しむ、いわば座興のようなものといえよう。そうではなく現在行われているような形、つまり演奏者自身の意志によって競技に参加、審査員による評価を甘受し、その成績如何によって賞を獲得する「コンペティション」が開催されるようになったのは、1890年にザンクト・ペテルスブルクで開催された《アントン・ルービンシュタイン・ピアノコンペティション》以来である。その数が本格的に増加したのは第二次世界大戦後で、今日では520あまりの国際コンペティションが存在している。すべてのコンペティションが毎年開催されるわけではないが、多い時には年間300回もの国際コ

ンペティションが世界各地で催されるようになった⁽¹⁾。国際コンペティションの乱立状況は「1位になっても社会的な注目を得られない」「上位に入賞してもコンサートなどの仕事につながらない」その他の新たな問題を生み、これに対する解決策の模索がすでに開始されている。

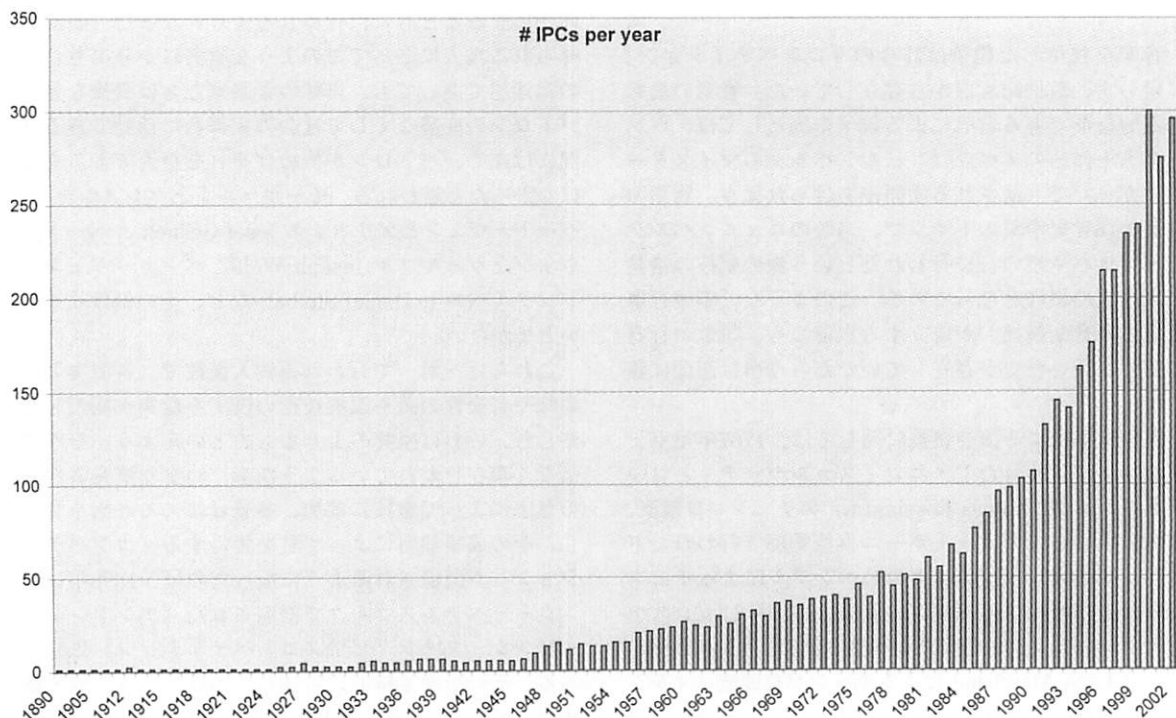
コンペティションの規模、参加条件や要求されるレパートリーなどには千差万別の差があるが、それは最終的な優勝者を決定するに至る採点方法においても同様である。筆者は2002年6月10日より29日までアメリカ合衆国ソルトレイクシティで開催された《第13回ジーナ・バッカウアー国際アーティスト・ピアノコンペティションおよび国際ピアノフェスティバル Gina Bachauer International Artists Piano Competition and International Piano Festival》に招聘され、審査に携わった。このコンペティションでの審査方法は今までとは異なる画期的なもので、本稿ではこの最新システムを詳細に紹介するとともに、そこに含まれる長所と短所に関する考察を行うことにする。

2. 採点方式の種類

そもそも演奏芸術を何らかの方法によって評価しようとしても、何を基準にその優劣を判断すべきか、という客観的な統一基準は存在しない。「音楽の演奏に点数をつけてその優劣を比較すること」自体が無意味なのだが、本稿ではこの行為を社会現象のひとつとして捉え、その是非については論じない。また「音楽による競技」は現代社会だけに限定される珍現象ではなく、上述の通り音楽の歴史の中で長らく行われてきたものである。

とは言うものの、複数の演奏家の演奏を聴いていると、そこに「AよりBの方が良い演奏をする」という感覚を覚えることは事実である。しかし「なぜBの演奏がより優れていると感じるか」の要因は複雑である。強いて挙げるとすれば、以下のような理由が考えられるだろう。

- ・技術的に優れている
- ・音楽の魅力において勝っている



《国際ピアノコンペティションの総数》

図版提供：DDr. Gustav Alink, Alink-Argerich Foundation, Holland

- ・音楽全般への正しい理解に好感が持てる
- ・楽器から響いてくる音そのものに魅力がある
- ・年齢の割には成熟している
- ・その他

しかしこれらがどのような優先順序と比重で組み合わせられるかは、すべて審査員の個人的裁量にまかせる以外に方法がないし、審査員自身もそれらの総合評価が自分の心中どのように組み立てられるかに関しては説明の方法がない。

また、10人の演奏を連続して聴いた場合、その10人全員をまったく同じ状態で鑑賞できた、ということはあるまいだろう。自分では公平に鑑賞したと信じていても、疲れ、睡魔、未知の作品、自分も演奏する作品、同じ作品が連続する、あるいは前後の演奏者の印象などの要因によって、審査員の心の中で組み立てられる評価基準は微妙に揺れ動くことになる。

そのようなことは敢えて無視して複数の審査員の評価を束ねなくては、コンペティションとしての最終的な結果を出すことができない。この問題を解決するためにさまざまな方法が考えられ、実行されてきた。それらは大きく分ければ以下のふたつに集約することができる。

- (A) 審査員の感覚を数字に換算し、それを集計するもの
- (B) それ以外のもの。たとえばイエス・ノーによる多数決など

前者が現在ではもっとも一般的である。10点満点、25点満点、100点満点などのスケールの中で、自分の評価を数字に換算して集計にゆだねる方法である。この方式にはさまざまな副次ルールが付帯する。

たとえば

- ・小数点以下の数字を受け入れるか（たとえば8.7などの評価点）
- ・可否の基準をガイドラインとして提示するか（100点満点の70点を合格の最低ラインとする、など）
- ・最終的な集計の際にいわゆる「上下カット（審査員が提出した評点のうち、最高点と最低点ひとつずつを除外して集計する方法）」を行うか
- ・その他

などさまざまな条件が考えられるが、上記三番目の「上下カット方式」のように、どちらかという審査員の不正行為防止のために導入されるものも少なくない。審査員の不正行為を完全に防止するのはほぼ不可能だが、ごく単純な不正行為としては以下のようなことがある。

- ・優先したい参加者に故意に高い点数を与える

しかしこれは「点数集計の際の上下カット方式」によって効果を失う可能性が考えられるので、どの程度の配点がもっとも効果的かを予測するには微妙な感覚と豊富な経験が必要となる。そのため、逆に

- ・優先したい参加者には通常、あるいは少し多めの配点を行うが、それ以外の参加者、特に優先したい参加者が上位になるのに障害となりそうな優れた演奏に故意に少な目の配点を行う

という行為も行われる。まだ何十人もの演奏者が参加している第一次予選ではあまり役に立たないが、6名程度に絞り込まれた本選の評価では、それなりの効果があり得る。

その他にも比較的少人数の審査員で評価を行っている場合、審査員のメンバーの中にたまたま自分の教え子がいる、あるいは審査員同士の間で何らかの利害関係のある場合などに仲間内で秘密裏に談合が行われると、最終結果をある程度恣意的に操作できることがある。

- ・自分の生徒への配点は辞退する

ということが事前に申し合わされる場合もあるが、どのラインを以て「自分の生徒」とするかを明確にするのは容易ではない。学内試験のようなケースでは明確でも、国際コンペティションのような場においては

- ・以前は自分の生徒だったが、密接な師弟関係が終了して以来すでに数年経過している
- ・講習会などで数回指導しただけの師弟関係である

などの場合、これが配点辞退の理由として該当するかは何とも言い難い。

また、合格基準点を定めればすべての審査員がすなおにそれに従って各参加者へ公平に配点が行われると

いう保証はない。たとえば100点満点で合格基準を70点と定めた場合、常識的には50点台から90点台を中心に配点が分布するものと考えられるが、審査員によっては「自分にとって合格範囲内にあると思われた参加者には90点台を中心に、それ以外自分の評価範囲外の者はすべて50点以下」のように「自己流のイエス・ノー方式」で配点する場合があり、これではいくら全審査員の配点を集計しても、意味をなさなくなってしまう恐れがある。

このように「評価を数値に換算すること自体に無理がある」という見地から(B)にあるイエス・ノーを利用した多数決方式にも、それなりの意義が認められる。しかしこの方式では票が同数集まった複数の参加者の間で合否の線をひかなくてはならない場合など(次の予選への人数が制限されている時など)、審査会議が紛糾する危険性が大きい。それを少しでも緩和するためにイエス(推薦)、ノー(非推薦)に加えてメイビー(次点として許容する)という票を加える場合も多いが、これにも限界があることに変わりはない。

数字を使う・使わないいずれの方法を採用した場合でも、審査会議と称して審査員同士の意見交換が行われる場合が多いが、この会議が公平な結果に寄与することは少ないようで、最近のコンペティションでは「数字を使用した集計方法を使用し、この結果を拒否することはできない」という審査方法が主流のようである。審査会議が行われても、そこで決定されることは、「1位を空席とするか」「いずれかの順位を複数の参加者で分割してタイとするか」など、プラスアルファの事項に関する合意を得る域を越えることはない。

「数字を使用した集計方法」に関しては昨今破竹の勢いで普及したパソコンを使用した、数学の偏差の考えをある程度取り入れた集計方式も存在する⁽²⁾。

いずれにせよ「なるべく公平で、大多数の人が納得できる採点システムを開発したい」と考え、それを使用しながらも、逆にそれが足かせとなって民主主義的な多数決の概念から抜け出せないもどかしさがある。ユニークな才能には平均的な高得点が集まらないばかりに極端に低い得点が配点されることがあるのに対し、「可もなく不可もなく」という演奏はとりたてて減点となる要因がなかったために集計上の平均値としては最高点を獲得し、最高位となるケースが後を絶たないのは周知の通りである。

補足として、コンペティションの予選それぞれの成績が加算されて本選の結果に反映される場合と、本選は(あるいはそれぞれの予選ラウンドも)独自に採点

される場合などの差が、聴衆に審査員の公平性に疑問を抱かせるきっかけになることも記しておく。それまで順調に演奏してきたのに本選で失敗した者と、ようやく本選にたどりついたものの、本選では最高の演奏を披露した者のどちらが上位としてふさわしいかの判断も、困難である。

3. ジーナ・バッカウアー国際アーティスト・ピアノコンペティションの場合

以上のように、コンペティションの採点はさまざまな問題を内包しているが、標記のコンペティションではまったく新しい運営方式が導入された。しかしこの新方式が採択されるに至ったきっかけは、上述したような従来の採点方法がもたらす問題とは別のところに存在していた。標記コンペティションの創設者として世界各地で開催される大小の国際コンペティションを長期にわたって視察し、そこから取り入れたさまざまな刺激を自ら主宰するコンペティションに反映させてきたポール・ボライ Paul Pollei⁽³⁾が指摘するところは以下の通りである。

若いピアニストは自分の将来を左右する可能性を秘めたピアノコンペティションに出場するにあたり、多大な犠牲を払って練習に打ち込み、高額の旅費や滞在費を負担しなければならない。しかし第一次予選におけるわずか20分程度の演奏だけで最初の判定が下される。それが不調に終わった場合、たぐいまれな才能を持ち合わせながらも何の評価も得られないのは、参加者本人のみならず音楽界にとっても大きな損失である。

私[ボライ]が経験した具体例は2000年にワルシャワで開催され、中国人のユンディー・リーが第1位となった第14回ショパン国際ピアノコンペティションの際のものである。私は第二次予選に間に合う日程でしかワルシャワに到着できなかったため、審査員をつとめていた友人アリエ・ヴァルディに一次予選の印象を質問した。ヴァルディの「予選は通過できなかったが、赤いドレスの女の子の演奏がすばらしく、できることならお金を払ってでももう一度彼女の演奏を聴きたいものだ」という答えを耳にした私は「自分が企画・運営するコンペティションでは『赤いドレスの女の子』のような素晴らしい演奏家が、名前さえも覚えられず、わずか一度の演奏だけですべての努力が水の泡になってしまうような事態に二

度と遭遇しないよう、何らかの方策を練らねばならない」と固く誓ったのだ。

その結果が今回のジーナ・バッカウアー国際アーティスト・ピアノコンペティションの運営スタイルに反映されている。その特徴を列挙する前に、コンペティションの概要をまとめておく。日本ではまだそれほど有名ではないが、アメリカ国内はゆうにおよばず、国際的にもメジャーのコンペティションのひとつである。コンペティションは《11～13歳のためのジュニアコンペティション》《14～18歳のためのヤングコンペティション》《19～32歳のためのアーティストコンペティション》《33歳以上のアマチュアのためのコンペティション》の四部門に分けられ、毎年一部門ずつ開催されている。

4. 第13回ジーナ・バッカウアー国際アーティスト・ピアノコンペティション概要

・コンペティションに参加できるのは2002年7月1日の時点で19～32歳となるピアニストで、国籍その他の制限は一切存在しない。

・参加申請に際して、指定の申請書類には以下のことを記載する。

- －学校あるいは教育機関名
- －ピアノを学んだ期間
- －ピアノ教師名
- －リサイタルの履歴
- －オーケストラとの協演履歴
- －推薦者（名前と住所）
- －コンペティションの参加履歴
- －マネージメント契約の有無
- －自分からのメッセージ（エッセイ）⁽⁴⁾

・参加希望者は申し込み時点において、世界各地で開催されるライブオーディション（実際に演奏を披露する。演奏時間は30分）に参加するか、72分のCD-R(W)または90分のカセットテープに30分の演奏を録音して送付するかを選択する。ライブオーディション、録音どちらの場合も、その時間内で演奏曲目は各自の自由である。またこのために準備した作品をコンペティションにおいて演奏しても支障ない。

・賞金総額は7万5千ドル。これに副賞が付随する。

- －ジーナ・バッカウアー・ゴールドメダル（第1位）
賞金3万ドルとプロスタジオにおけるアーティストポートレート制作、ソロプログラムによるCD制作、ユタ交響楽団との協演契約、諸外国におけるリサイタルおよびオーケストラとの協演の契約
- －ジーナ・バッカウアー・シルバーメダル（第2位）
賞金1万5千ドルとソロプログラムによるCD制作、ユタ交響楽団との協演契約、諸外国におけるリサイタルおよびオーケストラとの協演の契約
- －ジーナ・バッカウアー・ブロンズメダル（第3位）
賞金1万ドルとソロプログラムによるCD制作、諸外国におけるリサイタルの契約
- －ジーナ・バッカウアー第4位
賞金8千ドルとソロプログラムによるCD制作
- －ジーナ・バッカウアー第5位
賞金6千ドルとソロプログラムによるCD制作
- －ジーナ・バッカウアー第6位
賞金4千ドルとソロプログラムによるCD制作
- －聴衆賞⁽⁵⁾
賞金千ドル
- －ピーアジュリー賞⁽⁶⁾
賞金千ドル

5. 今回のジーナ・バッカウアー国際アーティスト・ピアノコンペティションの特徴

・コンペティションに参加するピアニストに対して第1次予選から第3次予選が終了するまで、いかなる選抜も行われない（参加者全員が3回演奏する）。

・参加者は各人が第1次予選では20分、第2次予選では30分、第3次予選では45分、計95分の演奏（ソロ）を行う。その際の曲目はすべて各人の自由選択とする。ただし同一の作品を複数のステージで繰り返し演奏することはできない。作品内に指定されているレピートは各自の判断に委ねられる。作品の演奏順も各自の自由である。現代作品を演奏する場合には楽譜を使用しても構わない。なお出入りおよび椅子の高さの調整時間は指定の演奏時間に含まれる。指定時間内において演奏を途中で止めたりすることはないが、規定の制限時間を超えた場合はその限りではない。なお聴衆の拍手の時間は演奏時間としてはカウントされない。

・3回の演奏が終了した時点で6名のファイナリストが選抜される。これら6名はオーケストラとピアノ協奏曲

を1曲演奏する。協奏曲の候補は指定されたもの⁽⁷⁾の中から選択する。

6. 新運営方式によるコンペティションに対する反響

事前のオーディション（ライブまたは録音）を通過した参加者全員が例外なく95分間演奏できる、という新システムが導入され、賞も非常に充実したジーナ・パッカー国際アーティスト・ピアノコンペティションに対する反響は大きく、全世界から520名もの応募があった。

申込者のうち約70%がライブオーディションを、残りの約30%が録音資料による審査を希望した。オーディションは2001年10月から12月の3ヶ月間に以下の都市で開催された。地区によって2～7名の審査員が立ち会い、評価が行われている。イスラエル以外すべてのオーディションにボライは審査員として参加している⁽⁸⁾。都市名のあとに特に記載がないものは1日だけのオーディションを意味する。

- ーローマ（イタリア）
- ーヘルシンキ（フィンランド）
- ーオスロ（ノルウェー）
- ーハンブルク（ドイツ）
- ーハノーヴァー（ドイツ）
- ーパリ（フランス）
- ーエルサレム（イスラエル）
- ー北京（中華人民共和国）
- ーシェンツェン（中華人民共和国）
- ー香港（中華人民共和国）
- ーソウル（大韓民国）
- ー東京（日本）
- ー台北（中華民国）
- ーシカゴ（アメリカ合衆国）
- ーゴイアニア（ブラジル）：8日間
- ーソルトレイクシティー（アメリカ合衆国）
- ーニューヨークシティー（アメリカ合衆国）：6日間

7. コンペティションの審査手順

・各参加者のすべての演奏（3回計95分）を聴いた後、各審査員は本選へ推薦したい6名に《Yes》、次点と思わ

れる3名に《Maybe》を投票する。票数は指定された通りでなければならない（Yesは4票だけ、という投票は行えない）。各審査員が推薦する本選参加者が誰であるかは公表されず、審査員同士の間でもわからない。審査員各自が推薦者の名前を記名する投票用紙には各自サインをしなければならない。

・開票にあたっては審査委員長、コンペティション事務局員および実行委員会のメンバーのみが立ち会って集計を行う。

・Yesの得票数が多いものから順に6名が選ばれる。得票数が同数のため6名で区切れない場合が生じた場合に初めてMaybe票を開票し、Maybe票の数の多い者から順位をつける。

・Maybeの得票数でも結果を得られない場合は実行委員会の判断によって「得票が同数の参加者に対して審査員による再投票を行う」「コンペティションの芸術監督の判断によって決定する」などの措置がとられる。

・公表されるのは6名の名前のみで、その得票順位は審査員に対しても非公開とする。

こうして6名のファイナリストが演奏を競うことになるが、最終順位は以下のような方式によって決められる。

・本選出場者の順位を審査員の投票によって決定する前に3次予選終了時における6名の順位が審査員に知らされる。（審査員はこの順位を知らないまま演奏を聴いている）

・各審査員は1位に該当すると思われる者1名の名前を紙に書き、サインをした上で審査委員長に提出する。この票数が審査委員長、事務局員および実行委員会のメンバー立ち会ひのもとで集計され、1位該当者が決定される。

・各審査員は残りの5名のうち、2位に該当すると思われる者の名前を紙に書き、審査委員長に提出する。

・以下1位決定の際と同じ方式で6位までが確定される。

特徴的なのは、「1位該当者なし」および「タイ」になるケースが存在し得ないことである。また最終結果に至るプロセスの間、審査員間のディスカッションはまったく行われない。

8. その他の特記事項

コンペティションを一般聴衆に対しても魅力ある企

画として提供する、という観点からも、さまざまなアイデアがこらされていた。

・プログラムのレイアウト

演奏会場で販売されるプログラムには、さまざまな情報が記載されている。コンペティションの歴史、応募要項の内容、審査方法の解説などとならんで、各参加者の紹介にはA4見開き2ページが費やされている。左のページはポートレートと経歴、右側にはコンペティションでのレパートリー。見開きページの下部には各自が応募の際にしたためのエッセイが掲載されている。これは各人を単なる参加者としてリストアップするのではなく、すでに事前のオーディションによって選ばれた「アーティスト」として処遇し、たとえ受賞は逃しても聴衆の記憶に残るよう、との配慮でもある。聴衆にとっては「32名の若い優秀なピアニスト⁽⁹⁾の演奏を聴くことができ、さらにその中から特に卓越した才能をピックアップするスリリングな過程を身近に体験できる」という見地からコンペティション全体が運営されている。

・ピーアジュリー peer jury の設置

ピーアとは「同僚」「仲間」という意味の単語だが、その訳語が指し示すよう、参加者と同世代の有志20名が、正式の国際審査員とはまったく別個に、しかし同じ方式で評価を行う試みである。これに参加する若者は、すべての演奏を聴かなくてはならない。最初の結果は第3次予選から本選出場の6名を選抜する際に比較されるが、ここでは国際審査員の判断に従う。しかし本選に出場した6名のうち誰に1位を与えたいかに関しては、ピーアジュリー独自の判断に委ねられる。ピーアジュリーによってノミネートされた参加者には1000ドルの副賞が授与される。

これは「若い世代の音楽学生にコンペティションと、そこで提供される質の高い演奏に大きな興味を持ってもらう」という観点において、非常に卓越したアイデアである。事実ピーアジュリーのネームタグをさげ、国際審査員と同じようなファイルを手にして会場に臨席する若者たちの目は、例外なく輝いていた。またピーアジュリーの出した結果は国際審査員にとっても、若い世代はどのような傾向の演奏に興味を持つのかをかいま見られる、貴重な情報だった。

・予選におけるキャストの登用

各参加者がステージに登場する際、前もってプロの

キャスト⁽¹⁰⁾による短い紹介が行われた。これは主にアマチュアを主体とするピアノファンに対しての啓蒙活動のひとつであり、「こんなスリリングで面白い企画にはそうお目にかかれぬ。ぜひ友人も誘ってください」「今までとは違う、全く新しい方式で審査が行われている」といった案内、さらには「携帯電話やポケットベルはスイッチを切り、演奏中はキャンディーの紙をむくのも控えましょう。むきたいのなら私が話している今のうちに」「些細なことでもステージで演奏中のピアニストの集中力の妨げになることがあるので、気をつけてください」「演奏はすべて録音されているので、できるだけ静かに」などの注意をユーモアたっぷりにくりかえして会場の雰囲気解きほぐすのと並行し、一般には馴染みのない作曲家の作品が演奏される際には、前もってその作品や作曲家に関する逸話などを簡単に紹介し、不慣れた聴衆がとまどうことがないようにする配慮が行われていた。

9. 新方式による評価への感想

通常のコンペティション審査では第1次予選での演奏を聴きながら、各参加者の良いところはともかく、マイナス点をチェックし、メモに残しておく作業が欠かせない。手慣れた審査員は「ミスタッチ」「暗譜の混乱」「弾き直し」その他のアクシデントを迅速にメモするために、独自の記号を開発している場合も多い。バックウアーにおける第1次予選の演奏時間は20分だが、各人の実力は通常最初の5分程度で予想がつくものである。「第一印象」は大切なポイントだが、この新方式ではこの第一印象とそのピアニストの本来の姿とのずれがどの程度あるか確認できる格好のチャンスだった。

第2次予選の演奏時間は30分。第1次予選は自分の思い通りに行かない場合が多いと想像され、第2次予選ではほとんどの参加者のレベルが上昇するだろう、と予想していた。しかし筆者の採点を再評価してみると29名の演奏者中、第2次予選以降で明らかにレベルアップし、第1次予選の不調を払拭するばかりか、その後平均以上の演奏を披露できたのが約5名だったのに対し、第1次予選では好印象を与えたのにその後まったく期待はずれの結果に終わった者が約7名いた。

筆者個人の評価のみで全体の傾向を推量することは不可能だが、もし第1次予選終了時点で選抜を行ったとすれば、筆者が推薦する参加者のうち7名はその後レベルを保てず脱落する運命にあったのに対し、5名はレベル以上の実力を持ち合わせながらも予選落ちしてしま

う、という結果になってしまう。ここから導き出される教訓は「第一印象はあてにならない」という筆者にとって新しい認識であった。

第1次予選はのめりこまずに静観し、第2次予選でおおよその確信を得たのち、45分の演奏が要求される第3次予選で、今までの印象が本当のものであったかどうかをじっくり検証すれば、その参加者が受賞後ただちに開始されるコンサート活動に見合うだけの實力を持ち合わせているかどうかの判断を、何回も吟味しながら確定することができる。

もちろん音楽に関しては各審査員の趣味も価値観も異なるため、さまざまな評価が出てくるのは当然である。最終的な結果が自分の想像したものとかけ離れていることもある。どんな評価にも「絶対」というものはあり得ず、たとえ複数の審査員の評価を公平に東ねて集計した結果が真実を指し示していなくても、これはコンペティションから切り離すことのできない、コンペティションの限界といえよう。

全参加者を複数回にわたって聴くのは苦痛ではないか、との心配はまったく杞憂に終わった。時間があれば「どこが悪いか」ではなく「なぜそうなるのか」「指導者の立場からはどのようにそれに対処できるか」を考え、「本人は本当にそう演奏したいのか」「その裏づけとなっている音楽的価値観はどのようなものか」など、より建設的な考察を落ち着いて行える。審査員が単なる「ミス探しのエキスパート」として壇上から見下ろしたような評価をするのではなく、自分自身のことも含めて演奏芸術上のさまざまな事象に関してじっくり考えるきっかけにもなり、審査員の精神衛生にも良好の作用をもたらすように感じられた。

10. 問題点と今後の課題

今回の採点システムは2001年に開催されたThe Gina Bachauer International Young Artists Piano Competition (14歳から18歳までの参加者に特定された国際ピアノコンペティション。ソルトレイクシティにて4年に1度のペースで開催されている)で試験運用された後、今回のコンペティションにて本格使用された。何のトラブルも起きず、審査員もこの採点方法と、そこから得られた結果にまったく不満を抱かなかった。

予選を重ねるごとの選抜 elimination が行われない新方式では、演奏者には落ち着いて實力を発揮できるだけの場を与えられる。たとえ不調に終わった場合でも「予想外の偶発ミスに起因した第1次予選落ち」といっ

た内面的な不完全燃焼を抱えたままの結果に終わることは避けられ、審査員側も余裕を持って演奏に耳を傾けられる。しかし実際に95分もの長時間国際審査員の前で演奏できるのは520名の申込者中わずか30名程度に限られ、490名のピアニストは事前にふるい落とされているのである。この選別を誰がどのように処理するか、という事が最大の課題と考えられる。

バックカウアーの場合はボール・ボライという、音楽的にもマネージメントの力量においても信頼度の高いボスがいたため、この問題が顕在化しなかった。ボライがイスラエルを除く全てのオーディションに臨席して演奏を聴き、録音媒体による応募に関してもボライ自ら処理できた、ということは大きな比重を占めている。

実際のコンペティションが開始される前に世界各地でライブオーディションを行い、事前に参加者数を絞り込み、コンペティションの予選をより見通しの良いものにし、同時にレベルも上昇させよう、と企画するコンペティションは複数存在する。

もし事前の審査をまったく行わず、応募者の意志だけを頼りにすれば、実際に参加する人数の把握が困難である。少なすぎるのも困るが、多すぎた場合には審査員に過大な負担を強いることになってしまう。各参加者の演奏時間を短縮するという方法もないわけではないが、第1次予選では「バッハの平均律、古典ソナタの第1楽章および練習曲1曲」といったように演奏すべき作品がジャンル別に指定されている場合が多く、そう簡単に短縮できないことの方が多い。

書類審査だけによって事前に参加者数を制限しようとしても、紙上に書かれた経歴はあてにならないものが多く、文面の華麗さと実際の實力との間には何の関連もないため、公平な結果を得られる可能性は薄い。

バックカウアーの新システムに関する反響は大きく、このシステムを取り入れたコンペティション開催を考慮している団体もすでに複数存在するという。しかし参加者全員が長時間演奏するこのシステムを使用する場合には、そう多くの参加者を受け容れるわけにはいかないため、そのセレクションをどのように行うかが最大の課題となる。

バックカウアーの場合はボライの存在があったため問題が生じなかったことは前述の通りだが、それでも520名から30名に制限するのは非常に困難だったという。

ボライの談話によると、まずライブオーディションの評価を整理し、それに録音媒体で応募された分の評価を加味して、各人の経歴を読む前に演奏技量と音楽

性の評価によって人数を減らすことが第一段階だった。ここで約100名までに減らすことができた。その後書類上から得られる情報を吟味してふるいにかけていったが、バックアワー国際アーティスト・ピアノコンペティションでは受賞直後からレベルの高いコンサートを次々に消化して行かなくてはならないため、その演奏活動に耐えうる人材を選別するのが最重要の課題だった。そのために書類上で注目したのは演奏活動歴、とりわけオーケストラとの協演経験だった。いくらオーディションでの印象が優れていても、実際のコンサート経験が不足している者は順次落とされていった。こうして目標の30名に近づける努力をしたものの、32名が限界だったそうだ。

作業を複数の審査員で分担したり、あるいは審査会議によって認証していくのは大変である。政治的なかけひきも皆無ではないコンペティションの運営において、すべてをまとめられる人物を得られるかどうかが一番難しいかも知れない。

採点システムにも落とし穴がないわけではない。投票による順位決定システムは以前に毎日新聞社主催の「日本音楽コンクール」において使用されていたものと類似のものだが、毎日コンクールの場合はさまざまな細則が定められていたと聞き及んでいる。Yes票がある程度集中してくれれば良いが、たくさんの参加者それぞれに数票ずつしか集まらなかったらどうするのか、という問題もある。現実にはあまり起こりえない、単なる「可能性のひとつ」ではあるものの、「もしも」への対応は事前に考えておかれるべきだろう。

もっともこのような事態を前にしては、たとえこれをポイント制で集計していたとしても状況は同じだろう。また審査会議を行っても満足できる結果が出にくいことに変わりはない。

11. 最後に

ピアノコンペティションをとりまく環境は想像以上に速い速度で変化している。コンペティションの数が増えすぎたための弊害にはもはや無視できない。単に「経験を積む場」として教育的配慮も含まれたコンペティションはともかく、国際コンペティション本来の目的は「その場を通して未来の大演奏家を発掘する」というところにあったはずである。しかし有名な、伝統を誇るコンペティションでさえ、その動向や結果の報道価値に陰りが見えてきた。多すぎるコンペティションは多すぎる「優勝者」を毎年垂れ流しにするだけで、

優勝者を演奏家としてバックアップしていこう、という配慮がなさすぎた。由緒あるコンペティションにおいてさえ、優勝者の「賞味期限」は次回に開催されるコンペティションまで、つまりわずか数年しか保てないようになりつつある。

このような状況のもと〈コンペティションそのものが生き残りをかけて企画を刷新し、優秀な演奏家が集まる〉→〈受賞者のレベルが高くなる〉→〈演奏家としてデビューし、将来にわたってプロとして活動できる可能性が高まる〉→〈それによってさらにコンペティションのステータスが上昇する〉という相乗効果を狙う動きは、今後さらに活発になっていくだろう。

それと並行してコンペティションの場を専門家だけの閉鎖的な世界にせず、音楽の魅力を広く一般の人々にアピールし、ライブ演奏のおもしろさを広く告知する場として利用できなければ、早晚クラシック音楽のコンサートそのものが聴衆の減少によって立ちいかなくなる時がくるかも知れない。

「競争」は人の興味を集めやすい。音楽の目的が競争にあるのではないのは自明のことだが、それを利用してまでもクラシック音楽ファンの増加を促進しなければならない局面にすでに至っているのではないだろうか。

参考文献

- ・Gina Bachauer International Artists Piano Competition and International Piano Festival, オフィシャルプログラム, Salt Lake City, 2002
- ・Gina Bachauer International Artists Piano Competition, 参加募集要項, Salt Lake City, 2001
- ・Alink, Gustav A., *International Piano Competitions*, Book 1, Gathering the Results, First Edition, Published by Drs. Gustav A. Alink, 1990
- ・Alink, Gustav A., *Piano Competitions*, 3rd Edition, Published by Drs. Gustav A. Alink, 1993
- ・岳本恭治『ピアノを読む』（音楽之友社、2001）

註

- (1) 国際コンペティションの総数と年間開催数はオランダのアーリンク＝アルゲリッヒ財団（Alink-Argerich Foundation）の統計による。

- (2) 原田茂生によって考案され、現在東京芸術大学音楽科の試験で使用されている方式はそのひとつである。
- (3) ポール・ボライはブリガム・ヤング大学教授として40年間教鞭を執ってきたピアニスト・ピアノ教師。2001年に退官、自ら設立したジーナ・バックアウアー国際ピアノ財団の芸術監督となる。1976年に現コンペティションの前身である Brigham Young University Summer Piano Festival and International Competitionを創設、以来25年間コンクールの運営に携わってきた。「Brigham Young…」の名称は1978年「Gina Bachauer…」に変更された。
- (4) 「自分からのメッセージ」は申込者が必ず書かなければならない欄である。《エッセイ》とのタイトルになっているが「国際コンクールを受ける動機はなにか」「なぜピアノを練習し、勉強し、演奏することが楽しいのか」「コンサートで演奏したいと望む動機は何か」「ピアノ、音楽と演奏に関する自分の目標（複数）は何か」すべてに関して短い感想や意見が求められている。これはコンペティション会場で販売される公式プログラムにて紹介される。
- (5) オーケストラと協演する本選（2日間）における全演奏を聴いた聴衆が投票するもの。
- (6) 後述「その他の特記事項」を参照。
- (7) 任意のモーツァルト、ベートーヴェン1～5番、ショパン1または2番、ブラームス1または2番、リスト1、2番または死の舞踏、シューマン、グリーグ、サンサーンス2または4番、チャイコフスキー1番、ラフマニノフ1～3番またはパガニーニラプソディー、プロコフィエフ1～3番、ガーシュウインのコンチェルト・インF
- (8) イスラエルにおけるオーディションは2001年9月11日に勃発したニューヨークのワールドトレードセンターにおけるテロ直後であったため、アメリカからテルアビブに至る空路はすべて閉鎖されていた。
- (9) 実際にエントリーしたのは29名だった。
- (10) ジーン・バック Gene Pack は41年間もFMで放送された朝のクラシック音楽番組のホストをつとめたほか、クラシック音楽の番組ディレクターとして活躍していた。